

学級雰囲気および学級規範が電子いじめ加害行動に及ぼす影響

Effects on cyber bullying of classroom atmosphere
and norms related to bullying tendencies

黒川 雅 幸

Masayuki KUROKAWA

教育心理学講座

(平成22年8月11日受理)

要 約

本研究の目的は、学級雰囲気および学級規範が電子いじめ加害行動に及ぼす影響を検証することであった。中学生1373名を対象に、質問紙調査を行った。階層線形モデルによる分析の結果、規律・凝集の雰囲気が高い学級ほど、直接的いじめや間接的いじめは少ないことが明らかとなった。また、いじめに対する否定的な規範が高い学級ほど、直接的いじめや携帯カメラによるいじめは少ないことが示された。一方で、快活な雰囲気が高い学級ほど、間接的いじめが多いことが示された。

キーワード：学級雰囲気、いじめに関する学級規範、伝統的いじめ、電子いじめ

問題と目的

いじめの被害に遭った生徒は精神的苦痛を伴い(e.g., 坂西, 1995; Kaltiala-Heino, Rimpelä, Rantanen, & Rimpelä, 2000), 不登校や自殺に至る場合も多い。しかしながら、いじめの件数は依然として多く(文部科学省, 2008a), 学校現場では早急な対応が求められている。

これまでの研究では、「仲間はずれ, 無視, 悪口」「いやがらせやいたずら」「叩かれたり, 蹴られたり」といった手口でいじめが起きていることが多いと報告されている(岡安・高山, 2000)。しかし, 2000年頃から携帯電話やインターネットが急速に普及し始め, 子どもたちもそれらを利用することが多くなったこともあって, いじめに携帯電話やパソコンが用いられるようになったと指摘されている(文部科学省, 2008a; 武田, 2007)。

Raskauskas & Stoltz (2007) は, 叩いたり, 蹴ったり, 無視したりするような従来型のいじめを伝統的いじめと呼び, インターネットや携帯電話を用いたいじめを電子いじめとして両者を区別している。電子いじめは, 『侮辱・脅かす・嫌が

らせ・脅迫などを行うのに, 電子機器を用いるいじめ』と定義されている。

電子いじめには, Eメールによるいじめや携帯カメラによるいじめ, インターネットによるいじめがあることが指摘されている(黒川, 2010)。Eメールによるいじめとは, 「うざい」「きもい」などのメールを繰り返し送る, メールを使って夜遅くに呼び出す, 「無視しよう」「遊ばないようにしよう」などのメールを仲間を送るといった内容のいじめである。携帯カメラによるいじめとは, 携帯電話の付属機能であるカメラを使ったいじめである。タバコを口にくわえさせたり, 服を脱がせたりして, 弱みをにぎるような写真を撮り, 仲間同士でファイルの交換を行う。インターネットによるいじめとは, ブログや掲示板などのウェブサイト, 誹謗・中傷などを書き込むいじめである。

日本においては, ほとんどの学校において携帯電話を持ってくることを禁止しているので(文部科学省, 2009), いじめが最も起こりやすい休み時間には(葛上, 2001), 電子機器を使用できな

い状態にあって、電子いじめが抑止されていると推測することができる。また、このことは同時に、電子いじめのほとんどが学校外で起きていることを意味している。たとえ電子いじめが学校外で行われるいじめであったとしても (Slonje & Smith, 2008), そのいじめに関わる加害者や被害者の関係は、学校で形成される関係とは無縁である場合は少ないと考えられる。実際、電子いじめ被害にあった生徒の半数以上は同じ学校の生徒からいじめられたと報告しており、また、電子いじめ加害者は伝統的いじめ加害者であることも指摘されている (Smith, Mahdavi, Carvalho, Fisher, Russell, & Tippet, 2008)。学校非公式サイトに関する調査でも、ターゲットにされた被害者は、書き込みをする人と同じ学校の生徒であることが示されている (文部科学省, 2008b)。つまり、電子いじめ加害行動の多くは、同じ学校の生徒に対して、学校以外でされていると言えるだろう。

ところで、いじめは集団で起きる現象であり (Salmivalli, Lagerspetz, Björkqvist, Österman, & Kaukiainen, 1996), 発生原因を加害者のみに帰属してしまうのは問題である。加害行動の生起には児童・生徒が準拠する仲間集団や学級集団からの影響があり (黒川・大西, 2009), 仲間や学級集団成員への同調行動が関係していると指摘されている (竹村・高木, 1988)。いじめ加害傾向と学級集団との関連を示した研究によると (大西, 2007), いじめに対して否定的な規範が高い学級ほど¹, その学級に所属する生徒のいじめ加害傾向は低いことが示されている。また、生徒間に協力的、親和的な関係やお互いに関心をもち合う関係にある学級では、いじめが少ないことが指摘されている (高木, 1986)。このように、学級集団の様態はいじめ加害行動の生起に影響を与えている。

そこで本研究では、学校外で起きる電子いじめ加害行動に対しても、学級集団の様態が影響を及ぼしていることを検証することが目的である。電子いじめにおける加害者と被害者の関係が、伝統的いじめにおけるそれらと同様であることを踏まえれば、学級集団の様態によって伝統的いじめだけではなく、電子いじめをも予測することが可能であると考えられる。学級集団の様態が電子いじめにも影響を与えていることが明らかになれば、教師が学級集団の状態から電子いじめの生起について情報を得ることを可能にするだろう。なお、学級集団の様態を測定する変数として、学級雰囲気といじめに対する否定的な学級規範を扱う。学

級雰囲気は、学級内の人間関係や活動、教師の勢力や影響力により醸成された結果的なものと捉えられ (根本, 1983; 佐藤・篠原, 1976), 学級集団の様態を代表する変数として適切であると考えられる。インターネットによるいじめが最も多いのは中学生であると指摘されていること (Williams & Guerra, 2007), 伝統的いじめの件数のピークは中学校1, 2年生であること (文部科学省, 2008a) を踏まえて調査対象者は中学生とした。

方法

調査対象者 公立中学校4校44学級の1年生690名, 2年生683名の計1373名を調査対象者とした (男子751名, 女子622名)。1学級当たりの平均人数は31.20人 ($SD=3.24$) であった。

手続き 担任教師の下で質問紙を実施した。

実施時期 2008年12月および2009年1月であった。教育委員会、実施協力校の学校長、学年主任の承認を得たうえで実施を行った。

質問紙の構成 フェイスシートには学年と性別を回答する項目に加え、回答したくない質問項目には回答しなくても良いことを明記し、回答の自由が保障されるように配慮した。また、無記名回答で担任の先生や保護者には個別の回答結果を知らせないこと、成績には関係がないことを明記し、回答への歪みが少なくなるように配慮した。(a) 学級雰囲気: 根本 (1983) の尺度を使用した。本尺度は19項目から構成されていて、SD法で回答を求めるものであった。「いごちの悪い (1点) ~いごちの良い (5点)」「きゅうつな (1点) ~のびのびした (5点)」といったように、ポジティブな表現を5点、ネガティブな表現を1点とした5段階評定で得点化した。(b) いじめに対する否定的な学級規範の推測²: いじめに対する否定的な学級規範の推測得点は、善悪を回答させるようなものであるため、高得点 (悪いことだと思う) に偏ってしまう傾向にある。そこで、高得点に偏らず、分散が比較的大きくなるように、ここではこらしめのいじめ (井上・戸田・中松, 1986) を測定した。こらしめのいじめとは、加害行動の動機として被害者に落ち度があったことを挙げ、こらしめる目的でいじめをするというものである。

¹ いじめに対する学級規範とは、学級の各成員がいじめに対してもっている信念の総体的記述を指す。

² いじめに対する否定的な学級規範の推測とは、同じ学級その他成員についての信念や行動を推測して回答しているものを指す。この変数を集団レベル (各学級別) で総計した時、学級規範として扱う。

質問項目では、いじめが起きたと仮定し、いじめ被害者がそれぞれ、人が傷つくようなことを平気で言う人、友だちとの約束を破る人、友だちのことを無視する人、自分勝手なことをする人であった場合、学級のみんなはそのいじめについてどう思うかを質問した。4項目であり、良いことだと思う（1点）～悪いことだと思う（5点）の5段階評定で回答を求めた。こらしめのいじめは、他のいじめ動機同様に学級規範が抑制効果をもつことが明らかにされている（黒川・大西，2009）。したがって、こらしめのいじめは特異ではなく、本尺度がいじめ全般の尺度という意味で使用することに問題はない。(c) 電子いじめ加害行動：黒川（2010）の尺度を使用した。なお、インターネットによるいじめは2項目しかなく、再現性の問題が予測されることから、「インターネットを使い、誰でも見られるブログや掲示板、ホームページなどにXさん（くん）の悪い噂を書き込むこと」の1項目を追加した。いじめる対象は、同じ学校の生徒（Xさん／くん）とした。また、13項目のうち3項目は、携帯電話を使用した内容に限られているので、携帯電話を所有していない生徒には回答を求めなかった。原尺度では、各項目に「何度も」という表現が含まれていたが、実施協力校の学校長と協議し、生徒の言語的理解を考慮して削除した。全くしたことがない（1点）、1回したことがある（2点）、2回したことがある（3点）、2回より多くしたことがある（4点）の4段階評定であった。(d) 伝統的いじめ加害行動：伝統的いじめ加害行動に関しては、追試の目的で測定を行った。黒川（2010）の尺度を使用した。全くしたことがない（1点）、1回したことがある（2点）、2回したことがある（3点）、2回より多くしたことがある（4点）の4段階評定であった。(d) および(e) は、現在の学年になってからのことについて回答するように教示した。

結果

各変数の分析 欠測値があるものは、その都度分析から除外した。

学級雰囲気 因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。根本（1983）の結果が4因子であったことから、4因子を指定して抽出した。ただし、いずれの因子にも負荷量が.35に満たない項目があったため、最も低い負荷を示した項目から削除していき、その都度因子分析を繰り返した。この過程において、2項目が削除された。1因子目は6項目に高い負荷がみられた安心因子

であった。2因子目は5項目に高い負荷がみられた規律・凝集因子であった。3因子目は3項目に高い負荷がみられた快活因子であった。4因子目は3項目に高い負荷がみられた長閑因子であった（Table 1）³。それぞれの因子に高い負荷を示した項目の合計得点を安心得点、規律・凝集得点、快活得点、長閑得点として尺度化を行った。尺度の信頼性はそれぞれ $\alpha = .91, .84, .75, .57$ であった。長閑因子に関する尺度の信頼性は十分ではなかったため、以降の分析では扱わないことにした。尺度の平均値は、安心得点（6点～30点）で $M = 21.67$ ($SD = 5.35$)、規律・凝集得点（5点～25点）で $M = 15.12$ ($SD = 4.17$)、快活得点（3点～15点）で $M = 11.69$ ($SD = 2.42$) であった。

いじめに対する否定的な学級規範 4項目の合計得点をいじめに対する否定的な学級規範得点とした。4項目による尺度の信頼性は $\alpha = .91$ であった。平均値は $M = 15.49$ ($SD = 4.10$) であった（4点～20点）。

電子いじめ加害行動 因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、原尺度と同様な3因子が抽出された。ただし、いずれの因子にも因子負荷量が.35に満たない項目が1つみられたため削除した。再度因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、2つの因子に負荷をしている項目が1つみられたため削除した。1因子目は5項目に高い負荷がみられたEメールによるいじめ因子であった。2因子目は3項目に高い負荷がみられたインターネットによるいじめ因子であった。3因子目は3項目に高い負荷がみられた携帯カメラによるいじめ因子であった（Table 2）。それぞれの因子に高い負荷を示した項目の合計得点をEメールによるいじめ得点、インターネットによるいじめ得点、携帯カメラによるいじめ得点として尺度化を行った。尺度の信頼性はそれぞれ $\alpha = .82, .87, .88$ であった。尺度の平均値は、Eメールによるいじめ得点（5点～20点）で $M = 5.64$ ($SD = 2.19$)、インターネットによるいじめ得点（3点～12点）で $M = 3.28$ ($SD = 1.22$)、携帯カメラによるいじめ得点（3点～12点）で $M = 3.60$ ($SD = 1.65$) であった。

伝統的いじめ加害行動 因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、原尺度と同

³ 根本（1983）では、安心、凝集、沈着、切迫と命名されていたが、本研究ではポジティブな雰囲気を高得点になるように作成したため、沈着は快活、切迫は長閑に因子名を修正した。また、凝集は規律を加えた方がよりの確な因子名になると考え、修正を行った。

Table 1 学級雰囲気の因子パターン行列と項目平均（標準偏差）

項 目	因 F1	子 F2	負 F3	荷 F4	量 F4	M(SD)
第1因子（安心）						
つまらない—たのしい	.92	-.11	.06	-.10		3.82(1.16)
いごちの悪い—いごちの良い	.90	-.01	-.07	-.02		3.57(1.04)
きゅうくつな—のびのびした	.76	-.07	.04	.06		3.61(0.98)
嫌いな—好きな	.72	.09	.19	-.14		3.62(1.13)
どうでもよい—大切な	.72	.12	.07	-.16		3.59(1.16)
不親切な—親切的な	.54	.23	-.01	.04		3.47(0.98)
第2因子（凝集・規律）						
ふまじめな—まじめな	-.07	.91	-.10	-.06		2.95(1.02)
だらけた—きびきびした	-.03	.86	-.00	-.04		2.82(0.97)
まとまりのない—まとまりのある	.02	.66	.24	-.04		3.25(1.13)
やる気のない—やる気のある	.04	.56	.25	.01		3.35(1.06)
おちつかない—おちつきがある	.13	.47	-.25	.26		2.75(1.15)
第3因子（快活）						
暗い—明るい	.05	-.08	.79	.10		4.22(0.95)
しらけた—しらけていない	.07	.06	.53	.05		3.71(1.06)
沈んだ—うきうきした	.29	-.11	.48	.16		3.75(0.96)
第4因子（長閑）						
せかせかした—のんびりした	-.00	-.01	.11	.69		3.38(0.99)
とげとげしい—なごやかな	.21	.24	-.04	.46		3.31(0.99)
いそがしい—ひまな	-.20	-.03	.12	.39		3.31(0.91)
<hr/>						
n=1337	因子間相関					
	F1	F2	F3	F4		
F1						
F2	.68					
F3	.66	.38				
F4	.58	.62	.23			

Table 2 電子いじめ加害行動の因子パターン行列と項目平均（標準偏差）

項 目	F1	F2	F3	M(SD)
第1因子（Eメール）				
何人かで、Xさん（くん）に「きもい」といったメールを送ること	.88	-.09	.03	1.18(0.64)
何人かで、Xさん（くん）に「うざい」といったメールを送ること	.85	-.08	.05	1.19(0.67)
何人かで、Xさん（くん）に「調子にのるな」といったメールを送ること	.82	.01	-.03	1.20(0.68)
「Xさん（くん）のことは無視しよう」といったメールを友達に送ること	.70	.11	-.06	1.17(0.58)
「Xさん（くん）とは遊ばないようにしよう」といったメールを友達に送ること	.69	.13	.00	1.14(0.53)
第2因子（インターネット）				
インターネットを使い、誰でも見られるブログや掲示板、 ホームページなどにXさん（くん）の悪口を書き込むこと	-.04	.85	.03	1.17(0.60)
インターネットを使い、誰でも見られるブログや掲示板、 ホームページなどにXさん（くん）が嫌いであることを書き込むこと	-.02	.84	-.04	1.14(0.57)
インターネットを使い、誰でも見られるブログや掲示板、 ホームページなどにXさん（くん）の悪い噂を書き込むこと	.10	.76	.04	1.10(0.49)
第3因子（携帯カメラ）				
携帯電話のカメラで、Xさん（くん）が嫌がるような写真を 撮って、友達と見ること	-.05	-.02	.95	1.15(0.56)
携帯電話のカメラで、Xさん（くん）の弱みをにぎるような写真を 撮って、友達と見ること	.13	-.02	.70	1.14(0.54)
携帯電話のカメラで、Xさん（くん）が恥ずかしがる写真を 撮って、友達に送ること	-.04	.07	.68	1.30(0.78)
<hr/>				
n=721	因子間相関		F1	F2
			F2	.48
			F3	.54
				.45

Table 3 伝統的いじめ加害行動の因子パターン行列と項目平均（標準偏差）

項 目	F 1	F 2	M(SD)
第 1 因子（直接的いじめ）			
何人かで、X さん（くん）をたたいたり、けったりすること	.83	-.14	1.26(0.71)
何人かで、X さん（くん）をおどすこと	.78	-.01	1.22(0.63)
何人かで、X さん（くん）のものを隠したり、こわしたりすること	.60	.16	1.25(0.69)
何人かで、X さん（くん）に使いはしりをさせること	.58	.15	1.23(0.67)
第 2 因子（間接的いじめ）			
何人かで、X さん（くん）を仲間はずれにすること	-.06	.93	1.53(0.95)
何人かで、X さん（くん）を無視すること	-.06	.88	1.51(0.93)
何人かで、X さん（くん）の悪口を言うこと	-.03	.71	1.95(1.21)
何人かで、X さん（くん）の悪口を紙に書いてまわすこと	.08	.57	1.22(0.68)
何人かで、X さん（くん）の悪い噂を流すこと	.26	.53	1.31(0.77)
n = 1336	因子間相関		F 1
	F 2	.59	

Table 4 階層線形モデルにおける偏回帰係数および残差の分散の推定値

	従 属 変 数				
	E メールによる いじめ	インターネットによる いじめ	携帯カメラによる いじめ	直接的 いじめ	間接的 いじめ
独立変数					
安心得点 (γ ₀₁)	-0.25	-0.13	-0.55	-0.39	-0.54
凝集・規律得点 (γ ₀₂)	-0.51	-0.20	-0.54	-0.51*	-1.15*
快活得点 (γ ₀₃)	0.93	1.09	1.15	1.51	2.79**
いじめに否定的な学級規範得点 (γ ₀₄)	0.20	-0.66	-1.18*	-0.64*	-1.16
τ ₀₀	0.10*	0.34**	0.13	0.09	0.34*
ICC	0.01	0.04	0.02	0.01	0.02

**p < .01 *p < .05 +p < .10

注) 算出された各推定値 $\hat{\gamma}$ は Table 内の値に 1.0×10^{-2} を掛けた値である。また、推定値 $\hat{\tau}$ は Table 内の値に 1.0×10^{-3} を掛けた値である。

これらの値は有効桁数を揃え、煩雑さを防ぐ目的で表内での記述を省略している。

級内相関係数 (ICC) の値は、独立変数を投入しないモデル (null model) によって計算された τ_{00} および σ^2 から算出した値である。

$$ICC = \frac{\tau_{00}}{\tau_{00} + \sigma^2}$$

様な2因子が抽出された。1因子目は4項目に高い負荷がみられた直接的いじめ因子であった。2因子目は5項目に高い負荷がみられた間接的いじめ因子であった (Table 3)。それぞれの因子に高い負荷を示した項目の合計得点を直接的いじめ得点、間接的いじめ得点として尺度化を行った。尺度の信頼性はそれぞれ $\alpha = .81, .85$ であった。尺度の平均値は、直接的いじめ得点 (4点~16点) で $M=4.97$ ($SD=2.16$)、間接的いじめ得点 (5点~20点) で $M=7.55$ ($SD=3.67$) であった。

研究目的に関わる分析 2レベルの階層線形モデルによって分析を行った。

モデル式

<レベル1 個人レベル>

$$IJIME_{ij} = \beta_{0j} + \gamma_{ij} \quad \gamma_{ij} \sim N(0, \sigma^2) \quad (1)$$

<レベル2 学級レベル>

$$\begin{aligned} \beta_{0j} = & \gamma_{00} + \gamma_{01}(\text{ANSIN}_j) + \gamma_{02}(\text{KIRITSU}_j) \\ & + \gamma_{03}(\text{KAIKATSU}_j) + \gamma_{04}(\text{KIHAN}_j) \\ & + u_{0j} \quad u_{0j} \sim N(0, \tau_{00}) \quad (2) \end{aligned}$$

ここで、 $IJIME_{ij}$ は学級集団 j における生徒 i のいじめ加害得点である。いじめ加害得点とは、電子いじめ加害行動の3尺度および伝統的いじめ加害行動の2尺度のそれぞれである。これら5つの尺度の母集団分布に関しては、低得点に偏る歪度が正の分布になることが経験的に予測される。そこで、5つの尺度得点については対数変換を行った値を用いた。

β_{0j} は切片であり、学級集団 j におけるいじめ加害得点の平均レベルである。 γ_{ij} は残差であり、その分散は σ^2 である。 u_{0j} は学級間変動を仮定しており、その分散は τ_{00} である。 γ_{00} はいじめ加害得点に関する学級集団の平均レベルであり、 γ_{01} から γ_{04} は学級集団におけるいじめの平均レベルに及ぼす学級雰囲気やいじめに対する否定的な規範の効果である。

ANSIN は学級レベルの安心得点、KIRITSU は学級レベルの規律・凝集得点、KAIKATSU は学級レベルの快活得点、KIHAN は学級レベルのいじめに対する否定的な学級規範得点をそれぞれ指す。

分析の結果、凝集・規律の雰囲気がある学級ほど間接的いじめが少ないことが示された。また、有意傾向ではあったが、凝集・規律の雰囲気がある学級は直接的いじめも少ないことが示された。快活な雰囲気のある学級ほど、間接的いじめが多

いことが示された。いじめに対する否定的な規範が高い学級ほど、携帯カメラによるいじめが少ないことが示された。最後に、有意傾向ではあったが、いじめに対する否定的な規範が高い学級ほど、直接的いじめが少ないことが示された。(Table 4)。

考察

本研究は、これまで検討されてこなかった電子いじめ加害行動 (Raskauskas & Stoltz, 2007) に対し、学級集団の様態が影響を及ぼしていることを検証することが目的であった。電子いじめは学校外で行われるいじめであると指摘されているが (Slonje & Smith, 2008)、いじめに関わる加害者と被害者の関係は、学校で形成される人間関係とは無縁ではなく、伝統的いじめにおける加害者と被害者との関係によって行われている (Smith, *et. al.*, 2008)。したがって、電子いじめについても、伝統的いじめ同様に学級集団の様態が加害行動の生起に影響を及ぼすことが予測できると考えられた。

電子いじめに影響があったのは、いじめに否定的な学級規範のみであり、いじめに否定的な学級規範が高い学級ほど、携帯カメラによるいじめが少ないという結果であった。Eメールによるいじめやインターネットによるいじめには、学級雰囲気やいじめに否定的な学級規範の影響はみられなかった。電子いじめ加害者と伝統的いじめ加害者との重複や電子いじめが同じ学校の生徒に向けて行われることを踏まえると (Smith, *et. al.*, 2008)、学級集団の状態から電子いじめが起きているかを判断できる可能性は高いと考えられる。しかしながら、本研究の結果は、電子いじめが学級で形成される場の雰囲気とは独立して行われることを示唆するものであった。

規律・凝集の雰囲気が高い学級ほど、直接的いじめや間接的いじめといった伝統的いじめが少ないことが示された。これまでも、いじめが起きた時の学級は、落ち着きのない雰囲気であったことが指摘されている (鈴木・田口・田口, 1995)。金山 (2007) によれば、公平・規律の雰囲気や集団凝集性は生徒の攻撃性を低めると指摘されており、規律や凝集性のある学級においては、攻撃性の低減からいじめ加害行動を抑制する効果があったと考えられる。

いじめに対する否定的な規範が高い学級ほど、直接的いじめが少ないことが示された。この結果は、大西 (2007) の研究と整合していた。学級レベルでいじめに否定的な規範が形成されているこ

とで、いじめをしてはいけないという圧力が生じ、生徒の加害行動を抑制することができると考えられる。しかしながら、学校から帰宅した後、その圧力は生徒個人に内在化されず、Eメールによるいじめやインターネットによるいじめが生じているものと思われる。

一方で、快活な雰囲気が高い学級の方が、間接的いじめが多いことが示された。鈴木他（1995）でも、いじめが起きた学級の雰囲気は明るかったと評定されている。明るい雰囲気の学級は、活発な生徒が多いと考えられ、その活発さゆえにいじめが起きているとも捉えられる。いじめの動機に異質性排除を目的としたものがある（井上他, 1986）。いじめ被害者の特徴として暗いという指摘があるが（杉原・宮田・桜井, 1986）、明るい雰囲気の学級でいじめが起きやすいのは、そうではない学級と比較して、暗い生徒はより際立ってしまうために、異質であるともみなされやすくなってしまうことが原因であるとも考えられるだろう。

以上から、学級集団の雰囲気やいじめに否定的な学級規範は伝統的いじめの抑制力にはなっていたが、電子いじめについては影響を及ぼさないことが示唆された。つまり、電子いじめは学級集団の様態とは独立して起きると考えられる。したがって、教師が電子いじめの実態を把握するために、学級集団の様態だけから判断することは難しいだろう。

電子いじめの抑制には、いじめをすることは悪いことであるという学級規範の影響を受けなくなった帰宅後でも、その規範を内在化させて行動できることが重要であると考えられる。また、教師が子どもたちの CMC（Computer mediated Communication）ネットワークを把握することも重要であると思われる。

引用文献

- 坂西友秀（1995）. いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.
- 井上健治・戸田有一・中松雅利（1986）. いじめにおける役割 東京大学教育学部紀要, 26, 89-106.
- Kaltiala-Heino, R., Rimpelä, M., Rantanen, P., & Rimpelä, A. (2000). Bullying at school: An indicator of adolescents at risk for mental disorders. *Journal of Adolescence*, 23, 661-674.
- 金山健一（2007）. 中学生の攻撃性を規定する諸要因の検討—学級雰囲気測定尺度との関連— 函館大学論集, 38, 57-72.
- 黒川雅幸（2010）. 中学生の電子いじめ加害行動に関する研究 福岡教育大学紀要第4分冊（教職科編）, 59, 11-21.
- 黒川雅幸・大西彩子（2009）. 準拠集団規範がいじめ加害傾向に及ぼす影響—準拠枠としての仲間集団と学級集団— 福岡教育大学紀要第4分冊（教職科編）, 58, 49-59.
- 葛上秀文（2001）. いじめの実態に関する実証的研究 鳴門教育大学研究紀要, 16, 35-43.
- 文部科学省（2008a）. 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08111707/002.pdf>（2008年12月5日）
- 文部科学省（2008b）. 青少年が利用する学校非公式サイトに関する調査報告書 <http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index48.htm>（2008年10月29日）
- 文部科学省（2009）. 学校における携帯電話等の取扱い等に関する調査 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/01/_icsFiles/afieldfile/2009/02/04/1234723_2_1.pdf>（2009年5月1日）
- 根本橋夫（1983）. 学級集団の構造と学級雰囲気およびモラルとの関係 教育心理学研究, 31, 211-219.
- 岡安孝弘・高山巖（2000）. 中学生におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- 大西彩子（2007）. 中学校のいじめに対する学級規範が加害傾向に及ぼす効果 カウンセリング研究, 40, 199-207.
- Raskauskas, J., & Stoltz, A. D. (2007). Involvement in traditional and electronic bullying among adolescents. *Developmental Psychology*, 43, 564-575.
- Salmivalli, C., Lagerspetz, K., Björkqvist, K., Österman, K., & Kaukiainen, A. (1996). Bullying as a group process: Participant roles and their relations to social status within the group. *Aggressive Behavior*, 22, 1-15.
- 佐藤静一・篠原弘章（1976）. 学級担任教師のPM式指導類型が学級意識及び学級雰囲気に及ぼす影響—数量化理論第Ⅱ類による検討— 教育心理学研究, 24, 235-246.
- Slonje, R., & Smith, P. K. (2008).

- Cyberbullying: Another main type of bullying? *Scandinavian Journal of Psychology*, **49**, 147-154.
- Smith, P. K., Mahdavi, J., Carvalho, M., Fisher, S., Russell, S., & Tippet, N. (2008). Cyberbullying: Its nature and impact in secondary school pupils. *The Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **49**, 376-385.
- 杉原一昭・宮田敬・桜井茂男 (1986). 「いじめっ子」と「いじめられっ子」の社会的地位とパーソナリティ特性の比較 筑波大学心理学研究, **8**, 63-72.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 (1995). いじめ場面の集団の認知—いじめ—いじめられの立場から— 熊本大学教育学部紀要(人文科学), **45**, 225-232.
- 高木修 (1986). いじめを規定する学級集団の特徴 関西大学社会学部紀要, **18**, 1-29.
- 武田さち子 (2007). 現代の「いじめ」の傾向—犯罪化と携帯電話・インターネットによる「いじめ」— 児童心理, **61**, 478-482.
- 竹村和久・高木修 (1988). “いじめ”現象に関わる心理的要因—逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性— 教育心理学研究, **36**, 57-62.
- Williams, K. R., & Guerra, N. G. (2007). Prevalence and predictors of internet bullying. *Journal of Adolescent Health*, **41**, S14-S21(Supplement).

謝辞

教育委員会を始め、ご協力を頂いた多くの先生方に深くお礼申し上げます。

Effects on cyber bullying of classroom atmosphere and norms related to bullying tendencies

Masayuki KUROKAWA (Educational Psychology)

This study aimed to examine how classroom atmosphere and norms related to bullying affect cyber bullying. Participants were 1373 junior high school students who answered a questionnaire. Results of a hierarchical linear model revealed that there was less direct bullying and indirect bullying in classrooms with a high than a low orderly atmosphere. There was less picture bullying and direct bullying in classrooms with high rather than low norms related to bullying tendencies. On the other hand, there was more indirect bullying in classrooms with a high rather than a low cheerful atmosphere.

Keywords : classroom atmosphere, norms related to bullying tendencies, traditional bullying, cyber bullying